

ブルリユークと日本の新興美術

二 見 史 郎

「比時代の大変動の前に既に日本の美術館には数点のセザンヌ、ル_(マ)アール、ピサロ、マチス等があった。千九百二十年だったか、二十一年だったか亡命ロシア人が未来派、立体派の絵画約五百点を東京で展観した。日本人は持前の飽くことを知らぬ暴食性からこの形成性の作品に同感してしまった。」¹

1923年（大正12年）秋のサロン・ドートンヌにはパリ滞在中の石井柏亭らの尽力で日本部の室が設けられて二科会の作品が陳列された。上の引用文はパリの新聞九紙の短評を税所篤二が総括した訳文の一節である。寄せ集めの文章で全く一貫性はないが、この箇所では、絹地の日本画に夢のような雰囲気を感じると述べ、朝鮮、中国、インドの美術から学んで神秘的な日本絵画を創造した伝統に従わずに西洋を模倣して何も創作しない日本の洋画を批判し、「フェノロサの仲間、及び美術協会が無くなると同時に画家として其処に残ったのは印象派、点描派、立体派、構成派の画家達であったと言ふ。情けないことだ！我々は新古典派であると思ってるのに。」と嘆じて冒頭の引用文に続くわけである。

前年4月パリの日仏交換美術展に日本の現代絵画、彫刻、工芸美術など約500点が陳列されたが²、新しい、非アカデミックな作品の交流展は上記の二科作品の陳列が最初であろう。フランス側のこの短評は日本の伝統と西洋模倣についてその後の一般的通念の萌芽を示しており、未来派、立体派、構成派については、すでにパリは新古典派であるのに、という見解をとっている。

ここに亡命ロシア人とあるのはダヴィッド・ブルリユークのことである。彼の名が日本の新聞に現れるのは1920（大正9）年10月2日である。朝日新聞は「露国未来派画家来朝一革命の作品など三百余点を携へて」という見出しで次のように報じている。

「露国未来派の父と称せらるるダビット・ブルリユック氏（三七）は未来派の画家パリモフ（三二）と共に一日御用船筑前丸で浦潮から敦賀着 午前十時発の列車で上京した。ブ氏は

二 見 史 郎

見るからに芸術家らしい緑色幅広のネクタイを蝶々に結び、フロックコートにシルクハット、
『軟かい山と清らかな空気、明るい国』と詩人らしく囁いて快よく語る。『私の来朝は露国
代表画家の作品を日本に紹介する傍ら日本の絵画を研究し、日本と露国の文化的諒解と結合
とを図りたいためである。携へてきた作品は未来派、写実派取交ぜ三百余点、そのうち私の
畫いた莫斯科の革命だけでも廿一点ある。〔敦賀特電〕』

同日の名古屋新聞は

「革命後浦塩に避難した露国未来派画家の大立物で又詩人であるブリュール（三七）と同
派のバリモノフ（三四）は同地美術協会を代表し同派の作品展覧会を日本で開催し兼て日本
美術研究の目的で〔来日〕……途中沼津にて年来憧憬して居る富士の雄姿に接したる上東
京に入る予定」と報じている。

ところが、9月30日の東海道沿線は台風で死者数十名の被害を出し、10月1日も大船戸
塚間は不通と新聞は報じている。

岸田劉生夫妻は9月30日雨中を鶴沼から鎌倉の長與善郎宅を訪れ、³『耶蘇』を新しき
村出版部から刊行したばかりの武者小路実篤らと歓談するが、出水で上下線とも不通とな
り、いずれも鎌倉に一泊している。ブルリュークらが入京するのは10月2日の夕方である。

この日エロシェンコは明治会館の第7回日本エスペラント大会普及講演会でロシア民謡
をうたい³、さらに10万盲人を慰める点字本刊行の資金集めの家庭音楽会（神田三崎会館）
で、この「さすらひの露国の盲青年」、「亡びたる国を脱れ骨肉の生死も知らぬ異国の盲青
年」は「見えぬ眼に笑を湛へて抱きたるギターをかきならしつ」「ウォルガを渡るさす
らひの心」³を歌い、バラライカで母国の民謡を唄った。

そのころ二つのエロシェンコ像が第2回帝展に搬入されようとしていた。シベリアから
帰ってきた鶴田吾郎が初秋の目白駅で「フサフサとした金灰色の髪の毛が輝き、黒のマン
トを肩からつるして、バラライカを手にした一人の盲目のロシア人」に会い、中村彝といっ
しょに「エロさん」の像を描いたいきさつはよく知られている³。中村彝は「生きた人間
の感情や思想が包まれ、神秘性までうかがわれる」このモデルに興奮し、「素的だ、素晴
しい、と無意識に感動の声をあげ」ながら描いた。興奮の6日の後、鶴田はいまにも血を
吐きそうな彝の制作をやめさせた。その9月14日の夜発熱した彝は再び病臥の身となった。

エロシェンコは翌大正10年の5月28日「危険性をおびた思想団体と密接な交渉をもち、社
会主義もしくは無政府主義の宣伝を実行する」かどで日本から追放された。「亡びる国を
脱れ」てきた「さすらひの盲青年」は一転して危険人物として退去を命令された。彼がウ
ラジオストックからチタを経て中国に移ったころの7月秋田雨雀編による彼の創作集『夜
明け前の歌』が、12月には第二創作集『最後の溜息』が叢文閣から出版された。

エロシェンコ像の帝展搬入のころ、ブルリューク入京の10月2日、彝は福田久道あての手紙に次のように書く。——「「エロシェンコ」の肖像について（あの絵では色数を出来るだけ節約し殆んど二三色でかいた）「方法と材料とは簡単な程いい。思想が充ち、効果を見る眼が明かになり、腕が相当に熟練して来さへすれば、方法や材料は如何に簡単でも充分雄弁に、且つ「堅牢不壊」の感じを与へ得るものである」——正しき方法を頑固に守る事、そしてそれを極度にまで生かし充実せしめて、全く「自己のものとなしきる」事、そこに画家の眞の道がある。”

この文章を知らずとも、彝の『エロシェンコ像』は油絵の技法をわがものとした一つの極点という印象を人はもつ。モデルの人間に対する画家の感動がみごとに技法と一体化した作品という感銘をうける。「思想が充ち」「自己のものとなしきる」という言葉は画家自身がこの充実の体験を表明したものであろう。

帝展に発表された彝の『エロシェンコ氏の肖像』が大きな反響と声価を得たことは無論であるが、この作品は前述の1922年4月のパリの日仏交換美術展に出品されて高い評価を受けた。そして劉生の作品はあまり評価されなかったといわれている。

最近あいついで中村彝展と鶴田吾郎展に接して、筆者は彝の作品のすぐれたマチエールに改めて強い印象を覚えるとともに、彝のエロシェンコ像のかげにかくれてしまった鶴田のエロシェンコ像が彼の生涯の仕事のなかで桁外れに上質のものであることを再確認する経験をもった。エロシェンコをモデルにした彝の画室での二人の制作がいかに感情の高まりのなかで行われたか想像に難くない。

1908（明治41）年荻原守衛は新宿中村屋裏の離れを改造したアトリエに住まわせてもらうが、彼の死後その礫山館に柳敬助がしばらく住んだ後、隣接のアトリエに中村彝が4年間暮した。彝が相馬黒光の娘俊子との恋愛事件でそこを飛び出した後ヘインド独立の闘士ラス・ビハリ・ボースがかくまわれた。彼が別のかくれ家に移ったとき、この彝のアトリエに入ったのがエロシェンコだった。大正5年シャムに旅立ち、ビルマを経てインドから追放されたエロシェンコが大正8年7月初め東京に戻ったとき、このアトリエに住んでいたのはアルメニア生れのロシア青年ニンツァであった。

ロシアの自然とロシア人にひかれて大正6年6月東京を旅立った鶴田吾郎はすでに2月革命後で邦人引揚げが始まっていたロシア情勢を見守って大連に留まり、その後ハルビンに滞在中の大正8年5月東露公司経営の元代議士白川から反革命の隊長セメーノフの肖像を頼まれ、絵具を取揃えに大連へ行ったときニンツァに再会した。ニンツァは革命後モスクワを飛び出した後、洗面具とシャツを入れた鞆一つで世界を放浪し、前年に大連で鶴田に会ったのち上海へ行っていた。大連に戻って鶴田から友人高野正哉への紹介状をも

らってニンツァは東京へ向い、鶴田はセメヨーノフの駐屯地チタに向った。

東京に着いたニンツァは中村屋に連れてゆかれ、相馬黒光の世話になった。大正8年の夏中村彝は茨城県湊町で療養生活を送ったが、その留守の間の下落合のアトリエで中原悌二郎はニンツァをモデルにして『若きカフカス人』を制作し、9月の第6回院展に出品した。この頭像は萩原守衛の感化によるロダンの柔かなモデリングよりはむしろブルーデルに近いアルカイックな造形を感じさせる。キュビズムではないがキュビックな感じのこの勁悍な首は大正彫刻の代表的作品となったが、同じ画室で一年後に彝とシベリア帰りの鶴田がエロシェンコをモデルに感動的な作品を生み出した。歴史が織りなす不思議な綾というほかない。

そして二つのエロシェンコ像が出品された大正9年10月の帝展にピョートル・イリーンの『露西亜の春の夕日』が入選した。10月4日の朝日新聞はその日、帝展に二点づつ出品搬入するイリン兄弟のインタビュー記事を掲載し、弟グレーヴとその作品『ヴォルガの唄』の写真をかかげ、さらに10月13日版は兄ピョートルの入選を伝え、10月17日版は入選作の写真を載せている。

雑誌「中央美術」の11月号もこの入選作の写真を入れているが、取立てて問題にするまでもない白樺の木立の風景画である。春に来日して麻布に住まったこの兄弟一家のことは直ちに朝日新聞に報ぜられ、「中央美術」7月号は佐藤孝任の兄弟訪問記を二人の作品の写真入りで出している。こうした扱いには亡命者というこの一家の境遇への興味と、おそらくは兄弟の端正な風景画を好ましく思ったであろう石井柏亭の意向が働いていたであろう。兄弟は革命を嫌ってペテログラードからカザン、オムスク、チタを経て日本に来た。そしてボリシェヴィキは芸術を破壊したと非難している。

そのころ革命と内戦で一時的にもせよ日本に滞在したロシアの画家は少なくなかった。

柏亭自身大正8年1月号の「中央美術」に谷中桜木町のジェレニェウスキーを訪ねた記事を書いている。この画家はポーランド系であるが、1888年シベリアのトムスクに生れ、西欧の各地で絵を学び、1917年に故郷に帰るが、父を失い、翌年10月に来日した。時と場所の状況から推してブルリュークと同じように内戦でシベリアを東に逃れてきたのであろう。

柏亭の助言で彼は1月末に上野竹之台陳列館で国民美術協会主催の個展を開いた。その評を斎藤与里が「中央美術」3月号に寄せて、絵は生硬でコナれていないが、伸び伸びした明快さは日本の洋画界の葉になると書き、その画風を普通の自然派、もしくは後期印象派風のものとして評している。彼の作品『椅子に凭る男』のカラー図版は同誌大正8年1月号を飾っている。

彼は、大正9年9月の二科展に出品し、小出楯重と共に二科賞を受けて会友に挙げられた。

この年の一月末、柏亭は大森の望翠楼にロシア人画家たちを訪れた（『中央美術』4月号 石井柏亭 「若き露人の群」）。ここに現れるのはニエダシコフスキーとシェルバコフで、二人は共にウクライナに生れ、ハリコフで絵を修業した。柏亭は大正7年の冬に桜木町のジェレニェウスキー訪問の折ニエダシコフスキーに会っている。

シェルバコフの『大島の秋』は原色図版で中央美術（大正9月3月号）に紹介されたが、それは錦絵風の紅葉の風景で、柏亭はその画風を日本版画とキュビズムの影響と見ている。

大正9年の二科展にはジェレニェウスキーと共にシェルバコフの『大島の秋』やニエダシコフスキーの作品が並べられた。この二人のロシア画家は翌年3月末から4月上旬に京橋五木屋楼上で小笠原を主題とした作品展を開いたが、同じ4月1日から4日まで東京日日新聞楼上でブルリユークとフィアラが小笠原滞留記念展覧会を開いた。この小笠原旅行はシェルバコフらがブルリユークとフィアラをさそったのかもしれない。

そのほかロシア画家には、中国経由で一時日本に滞在して大正8年秋フランスに去ったヤコブレフ、築地精養軒に泊っていたサカロフとアラトフらが出た。また、『中央美術』大正9年6月号には「露国画家フレーノフ氏、有楽町のフリジャンノフスキー方に滞在」という記事がある。このころ日本に流れてきたロシア人たちの多くは日露倶楽部を頼りにしたようである。

大正9年9月10日から15日まで万山緑舎主催によるハンガリー画家フランソワ・イムレ個展が上野松坂屋で開かれた。国立高等工芸学校の教師だったが彼はオーストリア軍兵士としてガリシア戦で露軍の捕虜となり、シベリアで5年を送った後、来日し、そのシベリア産の作品が展示されたわけである。柏亭の文と推測される「みづゑ」の評は「現実的形態と唐草模様との連結において充分でない」が、その根気と用意を学ぶべきであるとし、二科に陳列されたシェルバコフ氏といい、イムレー氏といい、「日本に見馴れぬ形式の画風をもたらしたるは歐洲大戦の結果である」と書いている。

このフェレンツ・イムレは1930年にダットン社から刊行した著書『血と氷を通して』のなかでウラジオストックの捕虜時代を語っている⁸。彼は捕虜のときブルリユークに会い、ロシア芸術家協会の会員にしてもらって展覧会に出品し、絵も売れ、注文もくるようになり、ウラジオストックの港の風景を描いて窮乏をしのぐことができた。

最近の新聞に山崎友宏氏の「親日派ポーランド人の死」という文章がある（朝日新聞1984年11月15日）。この新聞記者で日本文化研究者のバビンスキは大正7年バイカル湖付近でオーストリア軍の捕虜としてシベリア出兵の日本兵と接して日本文化に興味を持ち、日本語を勉強して帰国後60年間日本文化を多面的に紹介してきたという。

大正9年10月、ブルリュークが来日したころの国民新聞に、「ポーランド伯爵エス・ルビエンスキー氏画業に転ずる」という記事があって、大正12年4月には資生堂でルビエンスキー第4回個展が開かれている。そればかりか、震災後初めて開かれた展覧会という“Antiism展”には村山知義、尾形亀之助、高見沢路直（田河水泡）、佐藤吉次と並んでルビエンスキーが参加しているのである。

世界大戦、革命、内戦、干渉戦という動乱のなかでその歴史の奔流に巻きこまれた人びとの行路の変転はさまざまであるが、ブルリュークはどのようにして日本にたどり着いたのか。

ブルリュークの先祖はクリミア半島からウクライナのハリコフ近在のリュブシュキ村に移り住んだコサック系の農民で、祖父の代には広い土地をもつ富農となった。

ダヴィッド・ダヴィドヴィッチ・ブルリュークは1882年7月22日にこの豊かな農村で生まれた。少年の彼は父の狩りの勢子となって狐や兎を追い回した。16歳のとき、母のすすめで風景画家シーシュキンの弟子コレソヴァ夫人に絵の指導を受ける。翌年画家を志してカザンの美術学校に入学、さらに翌1900年にはオデッサの美術学校に籍を移す。妹リュドミラがペテルスブルグの美術アカデミーに合格する一方で、不合格となったダヴィッドは同じく絵の勉強を始めた弟ヴラジミールを伴って1902年ミュンヘン美術学校で学び、翌々年、兄弟はパリ美術学校でコルモンの指導を受けることとなる。そのころ日本人留学生たちの画法に深い印象を覚えるが、それはヨーロッパ人の火山のような表現とは対照的に「開花する花」のように思われたという⁹。

1905年帰国した兄弟は黒海沿岸のヘルソンで最初の作品展を開いた。さらに1907年には妹を含めた兄弟展がモスクワとペテルスブルグで開かれ、兄弟は「ロシア芸術家協会」展や「世界美術」展に出品した。この年3月、兄弟はラリオノフやゴンチャローヴァらと「花冠」展を開催するが、このころ彼らの作品は新しいロシア・プリミティヴィズムの傾向を見せる。それは「花冠」展に陳列されたマティス、ブラック、ヴラマンク、ドランなどフォーヴィスム作品に呼応する動きだった。

1909年イズデブスキーが組織した「国際サロン」展にはパリとミュンヘン（カンディンスキーら）から新傾向の作品が大量に持ち込まれたが、ブルリューク兄弟は20点ずつ出品している。

翌年には第2回国際サロン展ばかりでなく、ラリオノフらと「青年同盟」展に、マレーヴィッチらと「ダイヤのジャック」展に出品したブルリューク兄弟は文学の分野でも詩人フレーブニコフと『裁判官の飼育場』を刊行して未来派への道を切り開いている。カメンスキーとエレナ・グロを加えたこの詩人グループはブルリューク兄弟の住むヘルソンの

古名「ギレイヤ」を名乗っていた。そのころ考古発掘を手伝ったりしていた兄弟のアルカイック志向が反映したものと思われる。以後、「ロシア未来派の父」を自任するダヴィッド・ブルリュークの活動が始まるが、それは神話を秘める原始的生命に愛着する未来派であった。

1911年モスクワ美術学校でマヤコフスキーと知り合ったブルリュークはこの若き画学生のうちに天才詩人を発見し、その詩才のために物心の援助を惜まぬこととなる。翌年の末、ブルリューク兄弟、フレーブニコフ、クルチョーヌイフ、マヤコフスキーらの未来派文集『社会の趣味への平手打ち』が刊行され、D.ブルリュークはキュビズム論も寄稿した。

ブルリューク兄弟はミュンヘンの1910年の「新芸術家協会」展、翌年のカンディンスキーらの「青騎士」展に出品し、兄ブルリュークは1912年の青騎士年鑑誌にロシア・プリミティヴィズム論を寄せている。

美術分野にせよ、詩の世界にせよ、D.ブルリュークは立体未来派運動の鼓吹者として、組織者としての役割を演じた。彼はマヤコフスキーと1913～14年の期間新しい芸術運動の講演旅行を行い、モスクワから南はトビリシまで、東はカザンから西はキシニョフまで27の都市を巡回したという (Dreier, Ibid. P. 73)。

父の死に続いて大戦が起り、才能にめぐまれた弟ヴラジーミルはサロニカ戦線で、下の弟ニコライもルーマニア戦線で命を失った。ダヴィッドは長男のため兵役を免かれ、ウファに近いウラル山中の妻の実家で義父と共に軍隊のための干草集荷と輸送の仕事に従事した。その間、彼は大量の絵を描き、1917年までときどきモスクワやペトログラードを訪れ、10月革命直後の「ダイヤのジャック」展に参加し、マヤコフスキー、カメンスキーらと「未来主義のクリスマス」を開催した。

ブルリュークはフロックコートにシルクハット、頬には絵具で鳥を描いたりして詩の朗読をしたと言われるが、革命後のこの冬、エレンブルグはモスクワの「詩人のカフェ」で、片手にオペラグラスをもった厚化粧のブルリュークが高座にのぼり、「あたしの好きなのは孕み男……」などとやっていた、と記している¹⁰。

1918年3月、ブルリューク、カメンスキー、マヤコフスキー共同編集の「未来派新聞」第一号が刊行された。そして5月、10月革命後初めてモスクワのメーデーは未来派とシュプレマティズムの絵で飾りたてられた。

しかし、1918年に入ると、ウラルにいたブルリューク一家は内戦のためすべてを捨てて東へ逃れねばならなかった。貨車に寝泊りしてチェリャビンスク在のズラタウスト (ウラル東麓) にたどり着く。ほぼ自伝とみなされる Katherine S. Dreier: Burliuk の記述によれば、1918年春、彼は家族をそこに残し、生活の資をうるため新しい芸術と詩を説く講演旅行に

出発した。ところが、史書で見ると通り、5月14日チェリアピンスクでウラジオストックへ向けて輸送中のチェコ軍と西方へ送られるドイツ軍捕虜の衝突した事件をきっかけとしてシベリア鉄道沿線でチェコ軍とボルシェヴィキは戦闘状態になった。ウラル以東に次々に反革命政権が樹立され、日、米、英などのシベリア出兵が続いた。

ブルリュークは動乱のシベリアを東行し、チェリアピンスク、オムスク、トムスクなど沿線都市で、ときには炭坑で講演しながら1919年6月にウラジオストックに着く。鶴田吾郎がセメーノフの肖像を描きにチタに向ったところに当る。

ウラジオストックから家族を迎えにウラルに向ったブルリュークは内戦のなか1ヶ月かかってチェリアピンスクに着く。義父の葬式をすませたばかりの家族と共に再び避難民で満員の貨車に乗って東行する¹¹。ウラジオストックの手前のウスリースクで腸チフスにかかった彼は晩秋まで療養生活を送ることとなる。ウラジオストックではナイトクラブの支配人として働き、地方新聞に寄稿しつつも多くの絵を描く。芸術家協会を設立し、展覧会を組織したが、そこには亡命ロシア人やフェレンツ・イムレのようなドイツ軍捕虜の作品も陳列された。

来日の便宜を与えたのは浦塩派遣軍政務部長松平恒雄¹²（のちの駐米、駐英大使、ロンドン軍縮会議全権）と「ロスタ」、(ロシア通信社)である。同じころマヤコフスキーはモスクワの「ロスタ」で働いていた。果して極東とモスクワとの連絡はあったのだろうか。

大正9年10月2日夜東京に着いたブルリュークとパリモフは翌日には東京日日新聞を訪れ、近く展覧会を開く、と語っている。展示300余点の中味は未来派4割、印象派3割5分、写実派2割5分。ブ氏曰く「北斎、広重、豊国、歌麿を持ってゐる日本の芸術を憧れてゐるのは私許りでは無い、六十年前仏国のゴンクールが画家に与えた日本の芸術を更に我々は継承したのだから孫がお先祖の国へ来たやうなものだ」。車窓から見た実りの秋の日本を「幸福な国」と呼び、「顔に犬を画いて町を歩いていいか」などと頗る元気ではあるが家や同胞財産の行方から全く絶縁された「故郷」の事を訊くと暗い顔をした、と記事は伝えている。(東京日日新聞 大正9年10月4日)

展覧会を前にしたブ氏は語る、「15年も物の写生をやったから今は記憶と感覚で描いてゐる。露西亞の未来派は伊太利の未来派の主張やカンジンスキー派の主義或は象徴派立体派等を総て合したものである」と。(国民新聞 10月10日)

東京日日の大竹記者の世話でブルリュークたちは石井柏亭を訪れて助力を頼んでいる。10月7日星製薬三階会場の準備中の作品を柏亭は東郷青児といっしょに見たが、9日にも会場へ出かけてブルリュークらが作品に筆を加えている様子を記している¹³。

中学生の斉藤義重氏が出かけたとき、会場に観客はなく、二人のロシア人が絵の手直し

をしていて、ロシア語で何か言われたが、いてもよいと言っている風だったのでその仕事ぶりとして作品に接して非常な衝撃をうけたという話を筆者は何ったことがある。それまでやっていた絵が描けなくなり、当分はSF風の小説を書いたりして、何年かのち絵が描けるようになったそうである。以後の氏の強靱な造形の歩みはこのときの「芸術のあり方」の問いかけに端を発しているわけである。60余年を経ていまだに若気を湛えて新しい感覚を刺激するような空間を展開する齊藤芸術を見れば、このロシア画展はブルリュークらの作品の評価をこえて、日本の現代美術に良質の種子がまかれる機会を与えたと言えよう。

ブルリュークらのその後の足跡を尋ねよう。10月13日の招待日を皮切りに30日まで開かれたこのロシア画展に続いて星製薬3階では11月にポーランド画家スタニスラフ・ボチュハ展(65点)、12月初旬にハンガリー展(ストリーハ・シアンドル、マリアシ・ミクロシ、キーシ・ラヨーシら3名)が催された。

「みづゑ」192号によれば、大阪ホテルで開かれた第1回未来派美術協会大阪展にはブルリュークとパリモフの作品も陳列されたとある。

大正9年末から翌年にかけての冬期にブルリュークとその妹の夫ヴァツラフ・フィアラとパリモフは小笠原に滞在し、神戸に戻った。パリモフの作品70余点は上野竹之台で国民美術協会の特陳として並べられた(大正10年4月1日~24日)。

ブルリュークとフィアラの小笠原滞留記念展は4月1日から4日まで東京日日新聞楼上で開催。

日光や富士の風景が描かれるのはその後のことであろう。そしてブルリュークが京都高島屋や横浜で作品展を催すのも大正10年のことと思われる。

大正10年9月の二科展にはブルリュークとフィアラの作品が展示され、続いて第2回未来派美術協会展(上野公園下 青陽楼 10月15~28日)にはブルリューク(16点)、パリモフ(2点)、フィアラ(5点)、バルスラバン(1点)、リュバルスキー(1点)の出品があった。この第二回の大阪展は橋詰の織物組合の二階で開かれた(11月13~17日)。

この第二回展は続いて名古屋の愛知県商品陳列館で開催された(11月24~29日)。同時にブルリュークは名古屋の十一屋呉服店で個展を開いている(11月21~23日)。

翌大正11年1月24日から30日まで京都大丸呉服店でブルリューク個展。大阪の三越でも作品を展示したようであるが、期日は不明である。

大正11年2月8日福岡を訪れたブルリュークは県物産陳列所で個展を開く(2月11~15日)。

さらに5月10日から14日まで大阪白木屋で200余点に及ぶブルリューク個展が開かれている。

詳細については後述にゆずるが、大正10年11月ブルリュークといっしょに名古屋を描いた鶴城繁氏の紹介で筆者は昨年秋、後藤重弘氏宅を訪れ、所蔵のブルリュークの風景画を見ることができた。

また3年前には門田秀雄、星野勝成の両氏と同行して太田典礼氏が福岡の個展で購入された作品二点にも接することができた。また小野寺和子さん所蔵の作品も御父君が福岡の個展で入手されたものと思われる。(未完)

注

1. みづゑ 大正13年3月号 P.30
2. 日仏交換展は仏国の意向を小倉右一郎が帰朝して黒田清輝に伝え、二人が正木美術学校長や文部省と協議して仏国国民美術協会(会長ノルトロメオ)と交渉の上実現したものである。
日本からは久米桂一郎、和田英作らが渡仏し、五百点の作品がソシエテ・ナショナル・デ・ボーザールの会場の特別展として4月20日から6月30日まで展示された。古美術参考品約百点。三分の一が日本画で、竹内栖鳳、山元春挙らの水墨画も出品された。
フランス現代美術展は同じ大正11年5月に農商務省商品陳列所で、6月には大阪府立商品陳列所で開催された。作品はルノワール、シスレー、ルドン、ドニ、ロダン、ブールデルなど絵画280点、彫刻70点でエルマン・デルスニスが集めて将来したものである。
翌1923年11~12月のサロン・ドードヌの二科会出品のなかでは正宗得三郎、有島生馬、古賀春江らが上記短評の対象になっている。この交流展の際、同じ柏亭らの努力で第10回二科展特陳用にパリからはマティス、ピカソ、ドラク、ブラック、デュフィ、ロート、ビッシュェールらの作品40余点が送られてきたが、二科展初日が大震災で東京展は一日だけで中止され、京都、大阪、福岡で展示された。
3. 岸田劉生 「鶴沼日記」建設社 昭和23年 P.238—240
一日も欠かさず書いたこの日記を見ても劉生は10月に京橋の星製薬楼上で開かれたブルリュークの展覧会を訪れてはいない。このころ数え30歳の彼は数え7歳の麗子や村娘お松の像を描いている。
4. 高杉一郎 「夜あけ前の歌——盲目詩人エロシェンコの生涯——」岩波書房 1982年 P.226
5. 国民新聞 大正9年10月3日 エロシェンコはこのとき30歳で、彼が最初に日本に来たのは大正3年4月であり、祖国の戦争も革命も知らないわけであるが、この新聞の感傷的な文章はまるで彼を革命からの亡命者に仕立てている。
6. 鶴田吾郎 「エロシェンコと中村彝」エロシェンコ全集月報1 みすず書房 昭和34年、および鶴田吾郎「半世紀の素描」中公美術社。
7. 中村彝 「芸術の無限感」岩波書房 大正15年 P.369
8. *Burliuk by Katherine S. Dreier, The Société Anonyme, Inc. New York, 1944, P.85~86*
9. *Ibid., P.41*
10. エレンブルグ 木村浩訳 「わが回想」1 朝日新聞社 P.334.
11. 内戦の記録を調べると、当時ウラルは反革命コルチャック軍と赤軍の戦場であり、一家が出発した7月27日の翌日チェリアピンスクは赤軍が占領している。
12. 近年、五十殿利治氏が入手された星製薬のロシア画展覧会カタログによれば、松平恒雄と

並んで渡辺領事、大竹博吉（東京日日特派員）の名が挙げられている。（五十殿氏およびカタログのコピーを送って下さった斎藤義重氏にお礼申し上げます。）

13. 石井柏亭 「日本に於ける最初の露国画展覧会」 中央美術 大正9年11月号。



図1 ブルリューク（東京のイメージ）
大正9年10月3日（東京日日新聞にて）

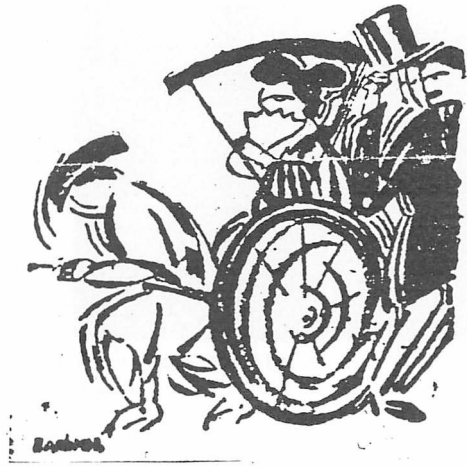


図2 パリモフ（人力車）大正9年10月3日
（東京日日新聞にて）



図3 ブルリューク（右）とパリモフ 星製薬にて
（大正10年10月9日）



図4 ブルリユーク 日傘させる女 大正10年
二科展出品



図5 ブルリユーク 陽光下の女 大正10年
二科会出品



図6 ブルリユーク 魚を商う男 大正10年
未来派第2回展出品

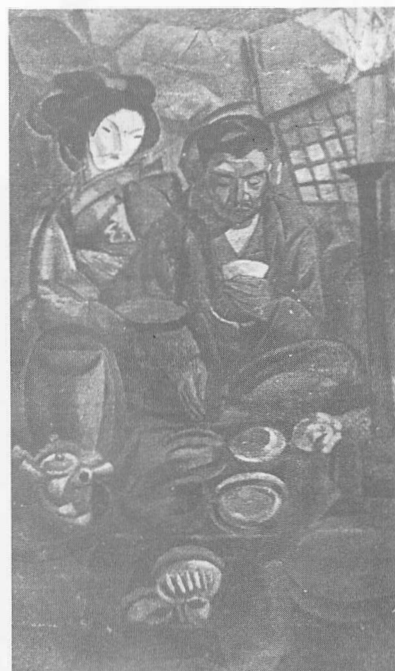


図7 フィアラ 御飯 大正10年
未来派第2回展出品



図8 ブルリユーク 小笠原の娘



図9 名古屋城を描くブルリユーク
後藤重弘氏撮影 (大正10年11月)



図10 ブルリユークが後藤重弘氏に贈った
風景画



図11 図10の作品の裏